

第204回 「元気に百歳」クラブ「道草」(第13回通信句会)開催

これからどうなっていくのかは不明ながら、新型コロナウイルス変異株であるオミクロン株が南アフリカから感染を拡大し始め、あっという間に日本を含む世界の70数か国に蔓延したということです。そしてこの感染症は更に拡大していくことは間違いなく、私たちにも新しい緊張感が走り、憂鬱な気分が支配し始めました。ただ、新型コロナウイルスが、どう変異していこうとも、私たちに来ることは、三密の禁止、手洗い、嗽、マスクの励行です。これ以上申し上げることはありません。

今年最終の通信句会です。参加されたメンバーは、芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然の17名でした。

11月26日のオンライン会議で決められた日程よりも、全てが前倒しで進行し「投句一覧表の作成」から「選句のまとめ」までを担当して下さった森田さんから、3日も早い12月11日に「選句のまとめ」をいただきました。今月の兼題は、兼題1「山眠る」、兼題2「おでん」、当季雑詠の自由題「冬」の3句の作成でしたが、皆さんが詠まれ、選句された天賞句と最多得票賞(☆印)句は下述の通りです。ご高覧下さい。

兼題1. 「山眠る」

◎『半眼の大仏の背に山眠る』	傘吉	天2
◎『新しき生命秘めをり山眠る』	明峰	天1
◎『まな裏に祖父の故郷山眠る』	晶如	天1
◎『広き田に鳥のひと啼き山眠る』	多佳	☆7

兼題2. 「おでん」

◎『丸椅子にピンヒール掛けおでん酒』	荻女	天1☆9
◎『ここだけの話もネタにおでん酒』	明峰	天1
◎『客一人おでん屋台の赤提灯』	清助	天1

当季雑詠の自由題 (=冬=)

◎『平凡を二十日残して年の暮』	明峰	天3☆7
◎『しぐるるや喪中の便りまたひとつ』	傘吉	天2☆7
◎『車椅子銀杏落ち葉を押してゆく』	清助	天1☆7
◎『短日や愛の詩集に絡まるる』	白然	天1
◎『遅番の扉開ければ冴ゆる星』	柴楽	天1
◎『渡り来てヒヨドリ日本の朝謳ふ』	歌多音	天1

兼題1では、傘吉さんの句「半眼の大仏の背に山眠る」が、天賞二つを獲得しました。天賞推挙のコメントとして「大仏と静かな山の取り合わせが面白い」ということと、「大仏の半眼の慈悲の目が、私たち衆生からは眠そう(失礼!)に見えますが、山眠るの一言を活かしている」とありました。次に明峰さんの句「新しき生命秘めをり山眠る」が、天賞一つを獲得しました。眠る山の内部では、襲いかかる風雪をものともせず、春に備えて新しい命を用意する自然の強さを称え、下五の「山眠る」に力を持たせました。次に晶如さんの句「まな裏に祖父の故郷山眠る」も、天賞一つを獲得しました。大好きであったお爺さんの故郷は何度も行かれたと思います。瞼を閉じて、今は眠っているお爺さんと登っ

た山々を思い起こしている情景が浮かびます。天賞は付きませんが、多佳さんの句「広き田に鳥のひと啼き山眠る」が、最多得票賞（☆印）を獲得しました。今は休んでいる広い田んぼの向こうの山々、鳥のひと啼きが合図になって、まるで眠ったように……。ファンタジーな表現が活き、選者の共感を得たようです。

兼題2では、荻女さんの句「丸椅子にピンヒール掛けおでん酒」が、天賞三つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。おでん屋さんの丸椅子に、場違いと思われるピンヒールの女性が座っている。想像すれば、いろんな場面が浮かんで来ますが、選者はそのギャップに投票したのでしょうか。次に明峰さんの句「ここだけの話もネタにおでん酒」が、天賞一つを獲得しました。おでん屋で飲むと、多くの話題が飛び交い、ここだけのシークレットニュースも出てきます。おでん鍋の数多い種と一緒に、ここだけの話も種になったかも知れません。次に清助さんの句「客一人おでん屋台の赤提灯」が、天賞一つを獲得しました。この句はちょっと足を止めた「おでん屋台」の情景を詠まれ、選者の共感を得られました。下五の赤提灯で、句をまとめられました。

当季雑詠の自由題では、明峰さんが「平凡を二十日残して年の暮」で、天賞三つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。今回、明峰さんは全ての句、三句とも天賞を獲得されました。お見事！大拍手！また、この自由題では、お三方が最多得票賞（☆印）を獲得されました。全体に実力伯仲、迫力のある句会だったのではないのでしょうか。

天賞三つ、最多得票賞（☆印）獲得の明峰さんの句は、ご自身の暮らしを平凡と捉えられ、年の暮、残りの二十日も平凡に過ごすことになるのか……という響きのこもった句です。とはいえ逆に、平凡でない二十日にしたい、そして年明けの後に、明るい望みを託されているのかも知れませんね。次に傘吉さんの句「しぐるるや喪中の便りまたひとつ」が、天賞二つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。老いゆく年齢を感じずる昨今、まさにこの句の通り「喪中の便りまたひとつ」状態と言えるでしょう。次に清助さんの句「車椅子銀杏落ち葉を押して行く」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。車椅子を押す人、押される人、思いはそれぞれ違いますが、銀杏落ち葉の上を行く人、そこには愛があります。今日の散歩が、心温かなものでありますように。

次に柴楽さんの句「遅番の扉開ければ冴ゆる星」が、天賞一つを獲得しました。お勤めが遅番勤務になられた日の、冬の夜の情景が見えるようです。「さよなら」と、同僚に声をかけ、屋外に出たときは、吐く息も白かったでしょう。そして空を眺める……。次に歌多音さんの句「渡り来てヒヨドリ日本の朝謳ふ」も、天賞一つを獲得しました。ヒヨドリが防寒のため、北国から南下して渡って来るのが、神戸の「鶉越」であったとは、今回初めて学びました。子供の頃から夏は虫取りに熱中した山でした。作者は中七後半から下五で、そのヒヨドリが、「日本の朝謳ふ」と結ばれました。選者は遠い源平合戦の歴史とヒヨドリの謳う日本の朝の対比をしておりました。白然の句「短日や愛の詩集に絡まるる」も、天賞一つをいただきました。俳句上達の参考になればと読んだ詩集には、短日は不向きでした。天賞推挙のコメントには「その情熱に乾杯！」と、仰っていただきました。

「道草」の年の暮は、12月20日からの週にありますオンライン会議で終了します。只今、その日程を決めるメールが飛び交っております。いずれにしても、寅年の新年はコロナウイルスの変異種、オミクロン株ウイルスの感染防止対策から始まることでしょう。でも、ウイルスには負けることなく防御を徹底し、来年も元気に明るいサロン活動を続行したいものです。皆さんどうぞ良いお年を！

白然記